

『県民の意見を聴く会』へ いただいた意見集

(募集期間：平成13年8月7日～9月6日)

もんじゅ安全性調査検討専門委員会

平成13年9月22日

(受付順、原文のまま掲載)

No. 1

住所：今立町

(内容)

平成 13 年 8 月 7 日 福井 NHK で「もんじゅ」に対する意見の発表の場を得て早速応募しました。「もんじゅ」は始動すべきではない」

人間の能力の限界を超えた発電装置だと思う。科学者は科学の分野は判っていてもそれを具体的に装置を作るのは人間です。「循環炉」はあくまでも「理想」の世界のもので理論と実践の差が歴然と現れていますよね。

水より比重の重い「ナトリウム」の流れる中へ直角に折れてくださいとばかり温度計を設置するのが今の科学技術庁の能力ではないですか？科学者は己の能力にうぬぼれてはいけないと思う。

いまや世界で成功していない「循環炉」をなぜ人の住むところで実験しなくては成らないのか？衛星すら何回も失敗しているがこれは人類に影響が少ないから仕方ないが「もんじゅ」は違うでしょう。ロシアのチェリノブイリの事故を福井で起こしてからでは遅すぎます、なんとしても阻止してください。

「もんじゅ」は世界で始めてだから、計画を進めるなら江ノ島の沖合い 100 キロ離れた無人島を浮き島で制作してそこに「もんじゅ」を移して発電を開始してください。多分、関東地区の皆が猛反対するでしょう、当然ですよね、人口密度の少ない福井なら再び事故が起こって人が死に至っても被害は少ないですから [] ほとんかく金が欲しいだけ、原子力の怖さを全く知らない子供に等しい。

関係者は全部事故が起こるまでの間は責任を持つというでしょう、人間の能力を過信してはいけない

< [] : 不適切な表現のため削除しました。 >

No . 2

住所：福井市

(内容)

電力会社の独自性や自由度を保証する以前の問題として、原子炉行政に幾つかの提案をします。

福井県は、抜き打ちで(事前連絡なしに)、安全性に関する検査と視察(汚染測定検査も含みます)に行くべきです。

行政として、行政の手で確認および測定したデータを、行政の責任で公表すべきです。(もちろん、企業側から安全測定のデータの提出を求めるのは、当然、なすべきですが)

県は、このような原子炉の安全管理に関して、測定管理ができ、危険度の判断ができる人材を配置すべきです。放射性化合物の取り扱いに関する免許等を有する人を、安全対策課の実動要員に配属すべきと考えます。

事故がおきた場合、住民の将来にわたる補償は、電力会社が100%自力で行う責任があることを、電力会社に宣言(新聞発表)させてください。原子炉の事故は、遺伝的な傷害を含みますから、その負債額は莫大なものになるはずで、自己責任が明確ならば、電力会社の原子炉の安全管理はきちんとしてくると思います。

No . 3

住所：群馬県

(内容)

<最大のネックは、ナトリウムの使用>

私も、核燃料推進論者の一人で、日本も早くフランス並になってほしいと思っているのです。

高速増殖炉は、大洗工学センターの LPG 加熱のナトリウム循環漏洩試験も見てきましたが熱交換に液体ナトリウムを使うのが最大のネック(危険)で、運転しても、いつかは必ずナトリウムの配管外漏洩が、絶対避けられない為、この試験が成功するには、熱交換媒体、等の更に、もうひと工夫が絶対不可欠と、感じられます。

又、マスコミも、国民も、このぐらいのことで、大騒ぎし過ぎです。もたもたしていると、日本もいつの間にか中進国になってしまう様な気がします

No . 4

住所：富山県

(内容)

どうか心で聞いてください。僕は原子力発電は全廃してほしい。チェルノブイリ事故以降イタリアは全廃完了、オーストリア、デンマークなどは開発を中止と、日本は世界と逆方向に進んでいる。事故になると核兵器になる。

自然ではないものを使うからいろいろな問題がある。燃料の運搬が危険で経費が莫大。原発自体の維持費も莫大。核廃棄物の処理が困難。

プルサーマルでリサイクルしてもその結果もっと処理が困難。国民が電力の消費を押しさえれば、原子力がなくても問題がない。電気機械からのCO2排出削減にもなる。

原子力を使いまだ電力の消費を増やすのですか？地球環境に調和しないことがまだわからないのですか？莫大な費用を自然エネルギーの開発にまわして下さい。国民が消費を減らせば家庭は助かり、地球は助かり、国も助かり危険もありません。

僕は安全か危険以前の段階で原発を反対します。それでも原発が必要な理由をお聞かせ下さい。

No . 5

住所：石川県

(内容)

もんじゅの事故等、原子力関連施設において事故が起こると「原子力に対する住民の信頼」が問題としてとりあげられます。「原子力に対する信頼」というとき、具体的にはどのような事柄が含まれているのでしょうか。ぜひ、教えてください。

No . 6

住所：大野市 発言希望（１）

（内容）

もんじゅは、商業炉ではなく実験用の原子炉ですから、いくらかの危険性が伴うのは本来当然のことと言えます。しかし、机上でさえ指摘できるような安全上の欠陥が、いくつも残っているのも事実です。

その一例が、一次冷却材として用いられるナトリウムです。二次冷却材に使われている水と接触すれば激しく反応するにも関わらず、それを遮る細管の壁部分にできる傷や腐食を検査する方法は未だ確立していません。

また、水と触れさせることができないため、事故の際に緊急に炉心を冷やすための装置も設置されていません。

加圧水型軽水炉にはこれらの装置が存在し、実際に今までの事故を予防、または大事故に繋がる前に止めてきました。もんじゅなどの高速増殖炉は軽水炉より未熟な技術であり、また、本質的に大きな事故を起こしやすいと予想されているのです。どうして、これらの設備なしで動かすことができますでしょうか？----

No . 7

住所：上志比村

(内容)

原電は今では我が国は無くしては成らないと思われる。万全の対策を講じられ放射能事故の無きよう、日頃の努力には敬意を表すると共に努力が何え我々も日頃から安堵致して祈ります。

しかし、何かが起こるか判らない昨今、果たして何時まで安全を守れるかが問題である。包丁一本でいたけない子供達を魚でも捌く様に殺し、又、丸腰である銀行、郵便局は及ばずコンビニ強盗は、日常茶飯事である。丸腰で有るが故に狙われる、軍備迄せよとは言わないがせめて「襲わせない」と思わせる対策が必要である。そこで我が心配である。終戦直前火事場泥棒的ロシア、戦中日本に対して恨みの残る、アジア諸国、日本赤軍派の残党、オウム真理教、暴力団、イスラム原理主義のゲリラ、数え切れない事実を丸腰の文殊、普賢の原発を如何に守り切れるかが、心配である。政府もマスコミも何故黙っているかを知りたい。

No . 8

住所：敦賀市

(内容)

<安全性にかかる県民の声>

もんじゅの運転再開について、私は再開をすべきとする立場で意見を述べます。私は、もんじゅはプルトニウムを燃料として熱媒体にナトリウムを使用する国産の研究発炉であることは十分に承知の上で、プルトニウムの元素の特性、ナトリウムの性質についても一般常識は持っているつもりです。

我が国のエネルギー消費の現状から見て、化石燃料、ウランが有限であることを考え、国策として使用済みウラン燃料から、プルトニウムを抽出して利用しようとし、原子力長期計画にもんじゅの研究開発の必要性を明確に記されている以上、一日も早く再開されることをねがっています。

サイクル機構、メーカー、検査機関、国が技術スタッフを常駐させて、運転中の保安体制を十分に、先ず安全を第一にされることを大前提に地元と共生を図って下さい。

No. 9

住所：敦賀市

(内容)

1. 安全性のPRについて

もんじゅはナトリウムを使用しますが、これがある物質と化合すると爆発すると言われています。私は化学に暗いので、そのへんの原因はよく分かりません。化学に暗い方は他にも沢山居ると思われれます。そこで周辺地区だけではなく、広く安全性を分かりやすくPRする必要があると思います。勿論、大いにしていると思いますが、兎角、機関紙等に掲載のものは、文章が固く難しい語句を使用しておりますので、一般の方には取りつきにくい物があります。文章を分かり易く、平易な語句を使用して(出来たら漫画をも採用して)国民に安全性を大いにPRする必要があると愚考致しますが。

2. 事故の対応について

事故は繰り返してはなりません。しかし不幸にして再発した時の対応が必要です。過去の経験を生かしての迅速な処置を望みますと共に、国、県、市の関係機関への間髪を置かぬ通報も必要です。そして地震のニュースではありませんが、安全であることも、即座にPRすることも必要です。事故隠しは国民に不信感を抱かせ絶対駄目です。

3. 新聞等の公害について

十数年前、他の原発で放射線漏れを起こした際、さも敦賀が放射能で満ちているように、新潟市より多数の市議が防護服やヘルメット姿で市役所へ視察に来たことがあり、また観光バスのガイド様が、「皆様。敦賀です。バスの窓をお閉め下さい。」と笑い話のようなことがありましたが、国、県、市の関係者は平素から新聞報道等が誇大報道をしないように、呉々もご配慮下さい。地元のイメージダウンにつながりますから。

4. 「もんじゅ」等の名前の変更について

過日の新聞に「奈良の宗教団体より、度々事故を起こす原発施設に「もんじゅ」と言う名前を付けるのは不当である」との抗議の記事が出ていました。これは「ふげん」にも言えることで、抗議の件ももっともだと思います。そこで、「もんじゅ」「ふげん」の名前を変えては如何でしょうか。科学の先端を行く施設にふさわしい名前が望ましいと思います。一般からの公表により、最新の名前に変えてはどうですか。

No. 10

住所：敦賀市

(内容)

原子力安全対策課が意見を募集し、又、福井県が独自で安全チェック機関を設けるとの事で発表が有りましたが、県民約85万人の何人が原発の安全性を理解できるのでしょうか。

原発や放射能の分野は、通常教育16年+特殊教育を受けたものが従事するのではないのでしょうか。

県が独自で安全チェックをすると、地元の県や市がチェックしたのだからと言って、国がそれを口実に何も地域、地元対策を考えなくなる恐れが有ります。

安全チェックは今まで通り国(関係名省)にさせて、県は形の有る、目で見える、地域対策や地元対策で保障をしてもらう方がベストだと思います。

それと、今一番問題になっているのが高速増殖原型炉「もんじゅ」です。「もんじゅ」と言えば、核燃料サイクル開発機構です。サイクル機構に関しては、解体するか、トップから部長クラスまでの人事を一新して、名称と体制を一新してからの話であって、安全審査及び再開問題などはとんでもない話で有ります。なぜなら、平成13年4月3日に発覚した約12億円の給与水増し事件、さらに予算から年間40億~60億円をプールしていた事件が有ります。私にはよく解りませんが、多分、必要な経費なのでしょう。

でも、この件で文部科学省のサイクル担当と、特殊法人等改革推進本部にも電話でお話したところが、問題にならないくらいさみしい答えが返ってきました。それで、日本原電や関西電力のように、通産省の下になれるようにサイクルを解体して、新体制にした方が良いと思います。お金の管理が出来ないのに、放射能の管理が出来る訳が無いのです。今だサイクルから文部科学省に、事件の報告書が届いていないらしいです。

この様な、道義的なことがきちっとしていれば、県民85万人が国が安全だと言えば、安全だと思うのではないのでしょうか又、この意見書を石原行政、規制、改革担当大臣にも陳情書として郵送しました。

(内容)

モンジュへの意見をそれぞれの項目ごとに400字以内で述べてネ、というのはなかなか困難なことである。何故なら400字で言い切れるものではないからだ。といって私は、反原発派ではないし反対のための反対を唱える集党所属でもない。何処にでもいそうなただのオンツアンである。それが原発について大それた意見を述べるというのだから、世も末というのかしらん。とは一種のテレだ！だ。

さて原子力発電所発電機の故障は、よくもまあこんなに出てくるものだと呆れている。本県には東京電力の福島第一・二原子力発電所があり、つい最近もジュラウドひび割れが見つかり問題となった。しかもこれらの問題は、大げさに言うと月に一度くらいの割合でマスコミを賑わしている。皮肉に考えると、東京原子力発電所の宣伝のための故障ではないか、などとも受け取れかねないのだ。それくらいの頻度での故障、一体全体どうしたものか、科学万能の中からうまれたにしてはちょっとモロイ。

今回本県東京第二原子力発電所3号機のシュラウドの故障は、シュラウド下部リング溶接部付近で発見された。同社は製造時の加工でシュラウド表面が硬化して生じた微小な応力腐食割れ原因であるとする報告書を国に提出したというのである。この報告によると、ひび割れのシュラウドは、応力発生条件の一つとなる炭素の含有量を低くした低炭素ステンレス鋼が使用されていたが、製造過程で外側面を削る機械加工が施されたため、表面に固くもろい層ができ、深さ0.3ミリの応力腐食割れが発生。これが引き金になって、その後シュラウドの全周にわたり最長約1.4メートル、最大の深さ約26ミリの応力腐食割れが進展したのではないかと推定している、というものである。これはまさに製造時の算定ミスである。ヒビ割れの発生条件となる低炭素ステンレス鋼を使った所に問題があったのだ、と私は考える。東電の技術職員は優秀な者が多い。取り分け東京大学理・工学部それも大学院博士課程出身者が多いと聞く。それらの者達がどうして低炭素ステンレス鋼を使用したのか、疑問である。しかも製造過程で、外側表面を削ると言うことが判っていながら、ということは削ることに表面に硬くもろい層ができることも知っていたはずであろう。科学技術者なのだから。こう考えるとやはり机上の設計そこの頭脳しかないのか。優秀とはいいいながらいい加減な集団なのだとしかいいようがない。東大卒でもピンからキリまでだからと考えると、サモアリスベシだ。

さて次は「ふげん」の配管割れについてである。「ふげん」は冷却配管でもひび割れの事故を起こしている。この度は新型転換原子炉ふげん(出力十六万五千キロワット)の配管ひび割れ事故で微量の放射性物質が四ヶ月にわたり施設内に漏れ続けた、というものであった。

この原因は減速材の重水に含まれる塩素が配管に付着し、応力腐食割れが生じたのが原因と発表した。ここでも転換炉原型炉ふげんの製造設計時に、科学技術職員のミスがあったことだ。どうしてもっと学問的な判断の下に、製造設計が出来なかったのだろうか。減速材の重水に含まれる塩素の化学変化を予測出来なかったのだろうか。応力腐食による配管の割れ、ひび入り等は科学者であれば容易に予測できるはずだし、予測しなければならぬのだ。それが無いのはどうしてなのか、疑問だ。

ここのも東大卒を鼻に掛けた尊大な職員のバカヅラがみえてならない。どうしようもない奴らだ。それともう一つ、製造設計が出来てこれなら大丈夫、あらゆる変化、諸要素に対してもこの通り製造されれば事故は起こさない。と製造する企業に依頼しても、企業でのモウケをいれた狡く、デタラメな製品化となれば、これはどうしようもない。シュラウド合金の各種金属の含有割合をその通りに正しく、良心的に製造されなければ、事故は当然、起こるべくして起きてしまう。ここに大問題があるのだ。

現代企業のクサレ切った狡猾なゴマカシをさせない事ほど難解なものはない。科学の粋を集めた原子力発電所がこんなに簡単に事故だ、事故だでは何とも情け無い、わらいものだ。それにしても、この原子力時代に「東海村での臨界事故」ほどバカゲタものはなかった。原子力の原子が、原始時代に逆行するのだから全くの噴飯ものだ。と言って笑って済ますわけにはいかない尊い人命が失われているのだから…。手作業での原子力時代なんてのも、日本人ならではの方法かもしれない。こんないい加減な方法が罷り通る原子力発電所の在り方では絶対許せない。

もしもはあってはならないが、旧ソ連のチェルノブイリ原子炉爆発の悲劇は、今も住民に被害を及ぼしていることは周知の通りだ。ロシアは嘗て「ロスケ」と日本が呼んでいた通り、物事に貧欲な割りには生活には鈍感である。というより政治範囲も広く、経済破綻を来しているから国民経済まで手が回らないのだ。アメリカのスリースマイル島事故もあったことから考えると、日本の原子力に対する安全方法はもっと慎重を期すべきであると考えた次第である。

No. 12

住所：敦賀市 発言希望（2）

（内容）

私は、高速増殖炉など原発の集中立地している敦賀半島から、十キロ以内に住んでいます。地震が起こったりする度に神経がいらだちます。「もんじゅ」のナトリウム火災の時には、いっ気に不安が募りました。通報の遅れ、更に事故現場のビデオ隠し、その後の会計上の水増しによる不始末等、国民の税金で運営されている特殊法人ですから許せないことです。既に約一兆円ともいわれる国民負担による投資は、きびしく見直されるべきです。

高速増殖炉の研究開発に取り組んだ諸外国では、技術的経済的に見通しが立たず、不安があり、撤退の道を辿っています。日本も運転再開は断念すべきです。県民世論は、運転再開反対が主流です。サイクル機構や政府は運転再開に向けて、PRを展開していますが、県は追従することなく県民の胸中こそ深く理解してほしいと思います。

県民の二十二万人署名は、重みを増しています。PRのキーワードとして安全、安心、安定を掲げていますが、事故への不安、原子力行政への不信、地域経済不振への不満はいまや鬱積しているのが実状です。時に「もんじゅ」については、未成熟な技術的到達を憂慮しています。プルトニウム利用の核燃料サイクルの方策は事実上破綻しており、基礎研究を疎かにした推進は、いかに国策とはいえ、県民には、酷策を押しつけることになりはしないでしょうか。

県民の安全と、暮らしを守るために、いまこそ政府的考慮で逡巡することなく、運転再開は認めてならないと思います。

No. 13

住所：春江町

(内容)

二度と失敗は絶対に許されません。考えられる、あらゆる最悪の場合を想定して万全を期して下さい。

理論的には、解明出来ない「ナトリウム」粉流の強力な魔力をも乗り越える安全対策をして下さい。今度惨事がおきたら「もんじゅ」は終焉です。

そこで、

改良の温度計では再度破壊するでしょう。温度計の本体がもぎとられても、ナトリウムが外部へ漏洩しないようにステンレス大管の外側から温度計の取付つけ部全体を覆う安全装置（簡単にとり外し可能）を必ず取りつけること。

つき立っている棒状の温度計でなく、ステンレス大管の内側にはりつくような（マウス状）温度計を開発して下さい。

機械的でなく、色、光、電気、光線、電波等による温度計を開発して下さい。

No . 1 4

住所：青森県

(内容)

< そばくなぎもん >

もんじゅの冷却材はナトリウムに替るものはないのか？なぜ水ではだめなのか。

今の原発から出る使用済燃料をそのままさらに燃やせる原発はつukれないのか。

No . 1 5

住所：石川県

(内容)

< 情報の公開を >

今年の春は敦賀半島に興味を持ち、半島を何回も車で回り、半島の良さを感じました。その中で、綺麗な自然の中に、うまく原子力発電所が調和してると思いました。綺麗な水島と敦賀原子力発電所と展示館。美浜の綺麗な海、美浜発電所と展示館うまく調和しているという印象を受けました。

その反面、「もんじゅ」は一体何処にあり、一体何をしているのかということがとても気になりました。此の際「もんじゅ」の良いところ、悪いところ、すべて公開したらどうでしょうか。できる範囲で中も公開したらどうでしょうか。

つまり、「もんじゅ」についてはアピール不足ではないだろうか。事故とか色々な問題があるだろうということは想像がつきますが「もんじゅ」を鬼っ子にはいけないと思う。

No. 16

住所：敦賀市 発言希望（3）

（内容）

< 「もんじゅ」安全性について >

1. 高速炉の安全性について、軽水型原子炉と異なる点を中心に論議をすべきである。

（1）燃料は高温ナトリウム中で使用、燃焼度が高いため燃料被覆管の内圧（約50気圧）によるクリープ効果やスエリング効果の影響評価と定検時も炉外に取り出して目視による検査は不可能、又燃料すべてを取り出して貯蔵するピットがない。ナトリウムにボイド反応度が炉心領域で「正」となることを考えると安全評価が妥当かどうか再検討すべきだ。

（2）「もんじゅ」で試運転中に微調整制御棒の騒動装置内にナトリウムが固化して動きが悪くなった。これは想定外の現象であり、運転開始、停止は制御棒のみに頼る高速炉ではナトリウム挙動の解明が必要である。

（3）燃料取扱事故、取扱い装置の故障は目視のきかない場所であり、軽水炉では目視による取扱中の事故を考えると再検討の必要はないのか。

（4）蒸発器伝熱管検査装置は亀裂状のキズは検知できないことはサイクル機構も認めている。水とナトリウムが接触する一番危険なヶ所の検査能力が問われている。

2. 「もんじゅ」は地震に弱いといわれている。直下型地震M6.5で耐震設計をしているが、設工認書類の耐震関係の基礎データにはすべて公表されていない。サイクル機構の職員も配管はペラペラといっている。熱衝撃に耐えるよう配管の口径を大きく、薄くして引き廻している。原子炉も吊り下げ型である。最近の阪神、山陰地震等でM7以上の地震が発生している。耐震設計の根本的な見直しをすべきである。

3. 「もんじゅ」に入っているナトリウム約1700tをすべて抜きとり保管するタンク設備がない。1次系ナトリウムは放射化されており、定検時の検査も作業員の被ばくと検査体制の万全が確保できるか疑問。

以上

No. 17

住所：敦賀市 発言希望（４）

（内容）

原子力発電所の燃料の燃えるウランも資源なので埋蔵量には限りがあり、このまま使っていくとあと70年分位と聞いております。ところが燃えないウランがプルトニウムになると、それが約60倍にも使えるようになり、そのために「もんじゅ」の開発が必要だと聞きました。また、「もんじゅ」は他の発電所と違ってプルトニウムを使うことに特徴があると聞きました。

資源が少ない我が国において将来のエネルギーを考える上では確かに「もんじゅ」は重要だと思いますが、違った目で見ると、開発段階でありプルトニウムを使うというところに一抹の不安があります。

プルトニウムという物質は燃えるウランと比べどの程度厳しい取扱いや管理が要求されるのでしょうか。プルトニウムを使うという事でなにか特別の対策がとられているのでしょうか。

（内容）

< 蒸気発生器細管損傷事故への対策について >

軽水炉の蒸気発生器細管損傷は、技術的には避けられないというのが現状である。軽水炉と比較して、「もんじゅ」の蒸気発生器の物理的条件は、遙かに厳しい。軽水炉の事故を見続けてきた者として、「もんじゅ」の蒸気発生器細管損傷事故は軽水炉以上に避けがたく、事故を収束させる対策について、そのまま信用して受け取れない。

細管破断時の急激な蒸気発生器内圧力上昇に対し、「圧力開放板」が設計通りに機能して一次系配管への圧力伝達を避けられるのか。「圧力開放板」の動作試験を、実機規模の実証試験として行っているのか。コンピュータ解析試験で済ませてはいないか。システムを構成する重要機器については、実機規模での実証試験を義務づけることが必要ではないか。

イギリスの高速増殖炉 PFR の蒸気発生器細管破断事故は、「もんじゅ」の事故想定を遙かに超えている。この事故の経験が、「もんじゅ」の安全審査にどのように活かされているのか。

< 「もんじゅ」建設費削減のための設計変更と事故の関係性について >

「もんじゅ」は建設費削減のため、当初の設計を大幅に変更して施行された。今回の事故では、そのために火災を早期に収束できなかった可能性がある。建設前の段階でどのように設計が変更されたか、そのことと事故との関係を明らかにすべきである。それを行わずに、今回の事故で設計を再度変更し、巨費を投じて「もんじゅ」の運転を始めようというのは本末転倒である。

「もんじゅ」事故の再現実験では、床の鉄板が溶けて穴が空いたが、関係者には予想外であった。ナトリウム漏洩に関する周到な実験が行われておらず、責任が問われない、弛んだ組織の開発実態が示されている。「もんじゅ」は原型炉であり、事故災害はきわめて重大である。にも関わらず、「実験施設だから予想外の事故が起きるのは仕方がない」だとか、「事故が起きてから対応すればよい」などの認識では、取り返しが付かない事態を招く。

< 蒸気発生器（SG）細管の溶接と ECT の精度について >

「SG 細管がポキッと折れることなど、工学的見地から見てあり得ない」という判断が伊方訴訟で採用された。美浜 2 号機ではそれが見事に覆された。美浜 2 号機の破断細管は、直前の定期検査では健全管と診断されたものであり、ECT の精度がいい加減なものあることが見せつけられた。

「もんじゅ」の SG 細管は、約 10 m の管を 7 ~ 14 本ずつ溶接して繋ぐ。それをループ状に曲げて束ねる。Na 中に溶接箇所が来ないような作り方が細管設計の常識であり、SPX、SNR 300 のループを除き、全ての高速増殖炉はその常識を踏襲してきた。「もんじゅ」はその常識から外れている。このことだけをとっても、「もんじゅ」の SG 細管がいかに危険かが窺える。「もんじゅ」の ECT では、細管接続部

に亀裂が存在する場合、接続部の信号と亀裂部分の信号とを識別できないということが報告されている。これでは、最も危険な部分の細管診断が出来ないということである。「もんじゅ」のSG細管の設計・施工及びその健全性を確認するためのECT精度について、どのような判断を持っているか。

< 「もんじゅ」の耐震安全性について >

「もんじゅ」は軽水炉よりも遙かに高温下で運転される。熱伝導の高いナトリウムを冷却剤として使うために、配管の厚さが非常に薄くされている。核燃（元動燃）技術者の表現を借りれば「ベランベランの配管」である。

配管材料の伸び縮みを吸収するために、蛇のように曲げて、熱交換機器をつなぐ。自重で破断するのを避けるために、複雑な構造を持った支持具で固定される。原子炉容器の肉厚も薄い。等々。地震に弱い構造を選択しなければならない理由が「もんじゅ」自身にある。旧科学技術庁が耐震安全性の確認のため1995年に行った模擬地震波による解析では、原子炉容器の応答値と許容値の比が1.16と小さく、安全余裕度がほとんど無い状況である。これはM6.5の直下地震を想定した数値であり、阪神淡路地震クラスのM7.2直下地震を考慮すれば、非常に危険な値である。「もんじゅ」全体の耐震安全性について、現行の安全設計で十分と考えるのか。

No . 1 9

住所：丸岡町 発言希望（6）

（内容）

「もんじゅ」では原子炉を冷やすのにナトリウムを使っているとのことですが、一方で発電するには水蒸気でタービンを回すとのこと。水蒸気を作るところではナトリウムと水が、通っている管は違っていても大変接近しているはずですが。この部分での安全性の確保はどうなっているのか関心があります。

もし万一ナトリウムがもれて水と反応したときに、いったいどのような事態になるのでしょうか。また、そういった事故を未然に防ぐ方法についてどのような研究・改良がされているのでしょうか。

No . 2 0

住所：敦賀市 発言希望（ 7 ）

（ 内容 ）

原発の蒸気発生器と云えば一番事故の起こりやすい機械の 1 つである。もんじゅの蒸気発生器は高さ 1 5 m もある巨大な機械で、この中に長さ 8 4 m 太さ 3 2 mm のパイプが 1 4 0 本も内から外に重なりあっているものでパイプの中は蒸気がものすごい勢いで流れ外側は高温のナトリウムが流れている。

これを検査する ECT 装置がうまく出来ていないという告発があった。しかも、この検査装置では一番可能性のつよい細管のひび割れが検出出来ないことが明らかになった。話によると、1994 年、この ECT による検査を始めたが、それはまだ終わっていない。その 2 年後から新型センサーの試験が始まったが、これもまだ終わっていないということが明らかになった。一方この検査器の開発を担当してきた三菱と核燃との契約は終わっているという。つまり三菱はこの開発から下りたということではないか。

もう 1 つ問題がある。1994 年もんじゅ事故のとき中央の原発安全委員会は、事故の原因となった温度計サヤ管は安全審査の対象にしていなかった。今回の場合もおそらくこの計測器の不備な点について全く問題にしないと予想される。

わたしたち福井県民はこのような一番大事な検査装置がわからないとか、しかも安全審査の対象にあげないような状況でこれでよいとはいえない。蒸気発生器が破壊されれば、それは中間熱交換器に及び原子炉の冷却がうまくいかなくなる。つまり原子炉の暴走という最も恐ろしい事故につながる可能性をもっている。福井県当局はこの点をうやむやにしたままもんじゅの運転再開を認めることは許されない。

No . 2 1

住所：大野市 発言希望（ 8 ）

（内容）

安全審査において想定されている気泡の発生は、ナトリウム蒸気でなく、ナトリウムの液面を覆っているアルゴンガスが一度だけ炉心を下から上へ通過したという極めて安全よりのものです。それでも、気泡の通過によって 0.1 秒の間に原子炉出力は 1.6 倍に上昇しています。

「もんじゅ」では、炉心の周辺部ではボイド効果は負ですが、炉心の内側領域では正です。連続的に気泡が発生する沸騰が起これば、たとえ制御棒を入れたとしても、制御しきれない反応が起こるのは疑う余地もありません。

「もんじゅ」ではナトリウムは沸騰しないという仮定が置かれていますが、万一ナトリウムが沸騰した場合にも、自然に核分裂連鎖反応を押さえる働きをするような設計がなされていなければ、「もんじゅ」はチェルノブイリの二の舞になるのではないのでしょうか。

(内容)

「もんじゅ」は研究開発炉であるから事故やトラブルが起こり得ます。市議会全協（二月十六日）での改造工事計画概要説明で、内閣府の方は「研究開発をやっていく上ではトラブルが生じないとは絶対に言えない。炉のプラント運転そのものに影響を与えないシステムをとってやっていく炉であるから、例えば軽水炉の開発においてもそういうふうな過程をもって研究開発段階から実用炉に移っていったのと同じことだ。安全裕度を十分にとって安全の確保を万全に期しつつやっていく炉だ」と言われました。現在の技術ではナトリウムを完全に封じ込めることはできないということです。

ナトリウムを扱う「もんじゅ」を軽水炉と同じように実用炉に移っていく研究開発炉として運転することは危険きわまりないことです。改造工事計画についてですが、事故調査は安全な第三者機関で行われなかったため、技術的にも真相の徹底究明から遠く離れているのではないかとされています。

事故は単なる技術的判断ミスによるだけでなく、基礎研究の成果が最新機器の設計に反映されなかった点、根本的な問題があったのではないかとということです。ナトリウム漏れの原因は、温度計のさや管の設計に際して破損のメカニズムは全く考慮されていなかったし、安全審査ではライナーに穴はあかず水素爆発は避けられるとしていましたが、事故や再現実験の結果からいえばナトリウム火災の可能性を過小評価していたということです。この改造計画はナトリウムが漏れた場合の対応ということですが、設計段階に返って改めて設計のやり直しをすることが必要であってナトリウムを完全に封じ込めることがきちっとされなければなりません。

拙速に改造すれば事故、トラブルが起こり、環境にナトリウムがでることになったら大変なことで運転はやめるべきです。

No . 2 3

住所：福井市 発言希望（ 9 ）

（内容）

今や、改革の時代、社会の様々な分野で改革が行われようとしています。特に官公庁、行政など、公の立場に立つ人に対して今ほど意識改革が求められている時代はないと思います。広くそこで働く人々の意識改革が徹底して行われると共に、自分のおかれている立場を今一度しっかりと見なおしてもらいたいと思っています。

「もんじゅ」を担当するサイクル機構も動燃改革を経て再出発した法人とききます。そして約3年を経て法人格を変えただけでなく、働く人達の意識改革は進んだでしょうか。安全な職場は、設備、システムによる安全維持と働く人々の安全に対する意識とがあいまって確保されるものと思います。しかし、外部からはその改革の状況がほとんど見えません。

サイクル機構は具体的にどう意識改革にとりくまれたのでしょうか。又、意識改革と並んで情報公開により透明性を図る事が最重要であると思いますが、情報公開にどう取り組まれたのでしょうか。その取り組みと成果を具体的にわかりやすく教えてくださいたいと思います。

No . 2 4

住所：敦賀市 発言希望（ 1 0 ）

（内容）

私は、6月6日に発表された1995年12月のナトリウム漏れ事故を教訓にした「改造工事」についてお聴きします。

改造工事の申請書には（漏れたナトリウムを排出する配管の追加や大口径化）（漏洩検出器700個の設置）（鎮火用の窒素ガスの注入設備の新設）（換気装置の自動停止化）の4項目が予定されているようですが、この工事でナトリウム漏洩があった配管類からのナトリウム抜き取り作業は、事故当時の50分から20分に短縮できるということが、伝えられているが、今度の改造工事は、事故の原因究明から再び事故を起こすことのないようにするための改造工事であるはずだが、ナトリウムの抜き取り作業を速めるための工事では、事故が起きることが前提となっており、この改造工事そのものが事故の対応のための改造であると考えられます。

これでは「もんじゅ」に対する県民の安全性に対する心配は大きくなる一方で、問題ではないかと考えます。

（内容）

1．信頼できない技術

「もんじゅ」事故までは、外国が次々と高速増殖炉から撤退していく中で「日本の技術は優秀、事故が起きたら直ちに停止し、拡大させない。絶対安全」と再三聞かされてきました。しかし5年前の事故で分かったことは、優秀どころか考えられないようないい加減な設計でつくられ、ずさんな技術で運転されていることです。そのいくつかをあげます。

「温度計さや管」の設計・・・ナトリウム火災の原因となった折れた「温度計さや管」は、素人が見ても問題とわかる形状で、動かし始めて3ヶ月、出力4割台で折れ、大量のナトリウムが漏れ、火災となった。実験炉「常陽」での技術蓄積はどこへ行ったのか。この「温度計さや管」の設計や審査体制の責任については、明らかにされていない。

発表の度毎に再三変わるナトリウム漏洩量、どうしてこんなことに手こずっていたのだろう

運転停止・・・「事故があったら直ちに運転を停止する」と云っていたのになかなか運転を止めない。あとでわかったことは停止の権限は現場になかったとのこと。これは市・県および住民との契約違反行為。これからは現場に停止権を与えるらしい。当然のことだが、他社の原発はどうなっているのだろう。

火災現場に、テレビカメラもなかった。実に意外。

ナトリウムに空気は禁物。換気用ダクトに穴があき直ちに送風を止めなければならないのに長時間止めずに、ナトリウムは燃え続けた。設計の問題か、運転マニュアルの問題か。

ナトリウム火災用に窒素ポンプが備え付けられていたが使っていない。なぜだろう。

ナトリウムによる鉄板の腐食、穴あきについて、「当時としては知見がなかった」とのことであった。が、動燃は「ナトリウム技術については永年の研究の蓄積がある」と豪語していたのに、あまりにもお粗末。

曖昧な運転マニュアル等々数え上げればきりが無い。「だから看板を塗り替え、『総点検』をして二度と起きないするようにする」と云う。しかし、「もんじゅ」を初めから作り替えるわけではなく、事故に関連するごく一部の改良をするに過ぎず大部分はそのままです。温度計の形を変えて同じ事故は起こさないにするだろうが、全体として到底信頼できるものではない。事故は予想しない箇所が発生する。

2．信頼できない原子力関係者の体質

「協定や約束は守らない」「虚偽の発表の繰り返し」「事故隠し」は、日本の原子力関係者の体質であり、事故が起こるたびに繰り返されている。「もんじゅ事故」における動燃は特にひどかった。これで懲りたはずなのに、「もんじゅ事故」の2年後に起きた動燃の再処理工場の火災・爆発事故でも情報隠しの体質は変わらなかった。いま看板を替え、何人かの幹部を替えて、さも新たに生まれたかのように宣伝しているが、果たして信じられるのか。私は信頼できない。技術者に必要なことは、事

実を正確に把握することで、この人たちに原子力を扱う資格はない。

№ 26

住所：敦賀市 発言希望（12）

（内容）

現代科学はこの世の中に様々な技術の結晶を生み出して、私たちの生活を豊かにしています。原子力発電所もその一つであると思いますが、一方でリスクも伴っていると思います。私たちが日常生活で便利に活用している乗用車や飛行機など、便宜性とリスクは常に同居していると言えます。要は、様々なハード、ソフトでリスクを最小のものにすることが出来るかどうかで、私たちの社会と同居出来るかどうか決まってきます。

この点について発電所の場合は、放射能をどのような場合でも内部に閉じこめるという安全対策が最も大事だと思います。大地震の場合もそうだと思います。

特に、地震の多発する日本原子力発電所の地震対策、とりわけプルトニウムを燃料とし、ナトリウムを冷却材に使う「もんじゅ」発電所の地震に対する備えはどうなっているのか、確認させていただけたらと思います。

No . 27

住所：石川県

(内容)

「安全性を報告する」とのことですが、報告もなにも、絶対の安全などあり得ないのではありませんか。どの施設も、「絶対」を謳っておきながら、チェルノブイリや茨城でも事故が起りました。

死者も出ていますが、こういった際に犠牲になるのは、必ず弱い立場の市民です。推進なさる方々、最も利益を受ける方々、「もんじゅ安全性調査検討専門委員会」の方々、安全を絶対と考えるのであれば、ご自身が最も危険とされる現場で働いて証明なさってはいかがですか。

ご自分のお子様がそのような仕事に就くとしたら、反対しませんか。ご自身、またはそのお身内の現場における労働実績を「報告」なさるといっているのであれば、安全も少しは理解も出来ようというものです。

No. 28

住所：小浜市 発言希望（13）

（内容）

<大事故の時の炉心安全解析の徹底究明を！>

ドイツが5,600億円で建設した高速増殖炉を運転することなく閉鎖、その用地をリゾートパークに転用したことは承知の通り。連邦議会はその炉の安全性について賛成派と懐疑派の専門家にそれぞれ調査を依頼し、議論を重ねた結果、許認可権を委ねられていた州政府が先の決定を行ったのである。

その懐疑派の中心的な核物理専門家のヨハン・ベネケ博士（ミュンヘン大学教授）が、96年3月、敦賀での講演会で警告された内容を、私は今でも鮮明に記憶している。「事故時にどれだけエネルギーが放出するのか判明できない」「実験データも、総合的な試験も、首尾一貫した理論も、資金もない」「動燃職員との意見交換で、米国やドイツを超える安全解析をしていないことがわかった」と。

6年近くの停止による燃料や炉心部の劣化も心配。この最重要な指摘、警告について県と検討委員会に徹底究明を望みたい。

<「専門委員会」の今後の運営について>

国の安全審査のみに委ねず、県独自の「もんじゅ安全性調査検討専門委員会」（6委員中に批判的立場の専門家が含まれなかったことには強く抗議する）の設置と運営公開、「安全性」を改造工事関連だけに限定しないで、広く県民の意見を公募し、「聴く会」を実施することに対しては、それなりに評価したい。

しかし、それらが単に「もんじゅ」運転再開を推進・容認するためのアリバイづくりではなく、県民の不安や要望を汲み上げ、真の安全論議を担保するために、県原安課と「専門委員会」に対して次の二点を強く要請する。

- （1）上記の県民の意見をすべて公表し、「聴く会」だけでなく、双方向の「話し合う会」を何度も聞くこと。
- （2）批判的な立場の専門家・研究者たちの意見を聴取したり、議論する機会を何度も設けること。

高速増殖炉を断念したドイツ州政府の主体的な取り組みにぜひ学んでいただきたい。

（内容）

<放射能被ばく基準について>

国が定める放射線被ばくに関する審査基準

平常時運転に伴って放出される放射能の公衆に対する判断基準1ミリシーベルト/年（許容被ばく線量と呼ばれている）

重大事故・仮想事故が発生した場合のめやすとしての判断基準、全身0.25シーベルト（めやす線量と呼ばれている）に基づいて「もんじゅ」の安全審査を行うことは、低線量被ばくによる晩発生障害や遺伝的障害の発生においてしきい値が存在しないという今日における科学技術的知見からすると私達住民の生命・身体の安全を護るものでなく危険に晒すものであり、認めることが出来ません。この件に関する審査基準の見直しを要求します。

<仮想事故が起こった時の被害について>

「もんじゅ」はその炉心特性から、炉心崩壊事故を起こす危険性が軽水炉と比べて格段に高く甚大な被害が起こるといわれているが、「もんじゅ」の安全審査で国は仮想事故が起こった場合でも炉内存在量の0.00034%にあたる51キュリーしかプルトニウムが大気中に放出されず安全だとしている。アメリカ原子力委員会「WASH-14001」における軽水炉の重大事故時のプルトニウム放出量（PWR0.4%、BWR0.5%）と比較しても非現実的である。

このような安全審査では私達住民の生命・身体の安全は護られません。この件について正当な評価を要求します。

<「もんじゅ」の耐震性について>

「もんじゅ」の立地する場所は、空白域による地震が起きる危険性や近傍のブロック内の活断層が動いた時に起こる地震の危険性にさらされている。空白域からは、甲楽城断層の北部や柳ヶ瀬断層があり、近傍のブロック内断層からは白木丹生リニアメント断層群・敦賀半島西岸断層・野坂断層群があると聞いています。中でも白木丹生リニアメント断層群は直下地震を引き起こすとのことです。

「もんじゅ」は耐震設計と熱応力設計という相反する条件の妥協の上に設計されているものであり、軽水炉よりも地震に弱いと思われます。前途した地震が起こり「もんじゅ」が損壊したならば、私達住民に取り直しのつかない被害を与えることとなります。

現行の耐震設計審査指針ではそれらの点が十分に考慮されていません。前途した一つ一つの可能性について十分な検証をし、少しでも危険性が見つかれば「もんじゅ」を廃炉にして下さい。

No . 3 0

住所：武生市 発言希望（ 1 5 ）

（ 内容 ）

私は、もんじゅが高速炉開発の大目的を達成することを願う福井県に住む一国民としての立場から提言致します。

（ 提言 1 ）

破損燃料への備え英国 PFR や仏 Phenix の原型炉では燃料破損への備えが良く整備されていたため約 20 年の運転で多様な挙動の破損燃料が発生したにもかかわらず、高速炉開発で最重要の「高燃焼度燃料開発」で満足すべき貢献が出来たが、独国 KNK は破損燃料への備えが不備であったため、燃料破損が炉内の燃料汚染事故へ進展し、「高燃焼度燃料開発」に貢献できずに、廃止措置に追い込まれたと聞いています。

福井県もんじゅ安全審査会ではもんじゅの大目的「高燃焼度燃料開発」を達成するために、現状のもんじゅが燃料破損への備えにおいて英、仏国並か独国並かを調査され、もし独国並であれば貴審査会が適切なご指導をされることを切に希望します。

（ 提言 2 ）

冷却方式の変更もんじゅに採用されている NA 冷却方式は 20 世紀末までに米国、英国、仏国、独国においては、開発機関の反対を押し切り、政治家がこの方式にストップをかけたと聞いています。NA 冷却方式は、冷却そのものには大変威力を発揮するが関連系と共存性が良くないのでシステムが複雑となってしまうと聞いています。

又、この 30 年間で PU 資産も豊富になり急いで NA 冷却方式の完成を目指さないで、関連性と共存性の良いガス冷却方式の開発の時間的余裕もあると聞いています。

これからのことからガス冷却方式への変更を検討されることを提言します。

No . 3 1

住所：敦賀市

(内容)

ナトリウム漏洩事故以後、県民の不信感は増し、安全点検や調査が行われても不安でなりません。「もんじゅ」を推進しようとする技術者や専門家の点検や調査では、片寄った見方に陥りやすいと思うからです。

ナトリウム漏洩事故のときも、有りえない考えられない事故だと報道されていましたが、同時に放映されていた漏洩箇所の配管の説明を見ると、素人目にも十分考え得る事故のように思えました。

真剣に「もんじゅ」の安全を考えるのならば、賛成や推進派の点検や調査意見を聴くだけでなく、高速増殖炉の危険を訴え反対している技術者や専門家の点検や調査意見も採り入れ、平等で公平な立場から安全性の調査検討がなされるべきだと思います。

止める勇気を持つことも大切です。国が推進しているからという理由で、住民の命を軽んじてもらいたくないものです。

No . 3 2

住所：敦賀市 発言希望（ 1 6 ）

（内容）

国は原子力安全委員会の体制を変えた。旧来は、総理府に原子力安全委員会があり、科学技術庁の原子力安全調査室が事務局をしていた。これを内閣府に移し、独立した事務局を設け、増員し約100名の体制となったと聞いている。

「もんじゅ」に関しては、行政庁の1次審査として、経済産業省に属する原子力安全、保安院が審査を行い、2次審査は原子力安全委員会が行うことになるという。安全審査という言葉は耳慣れているが、原子力安全委員会や行政庁の体制が変わったことなどで安全性確認の流れが一般の人にはよくわからない。

県として、県民に議論してもらおう上で、「もんじゅ」の安全審査がどのようなに行われるのか、分かりやすい説明や解説をしていく必要があるのではないかと。又、県の委員会は、国の安全審査との関係では、どのような位置付けと考えていいのか。

No . 3 3

住所：敦賀市 発言希望（ 1 7 ）

（内容）

政府はエネルギー資源に乏しい日本にとって高速増殖炉開発は必要だとはいつているが、95年12月に高速増殖炉もんじゅのナトリウム漏れ火災事故が起き、その後も核燃料再処理施設の火災爆発事故やプルトニウム循環方式の主要施設でも重大事故が相次いでいる。これらは、政府の安全審査では絶対起きないとされてきた。

このように日本の原子力政策の生き詰まりが住民の安全にとって極めて危険な形で露呈し、原子力政策に対する国民の不信と批判をつよめている。また、国際的にみてもサミット参加国の中を見ても欧州では高速増殖炉開発の失敗を認め閉鎖や解体をしたイギリス、ドイツ、廃止を決めたフランス、さらにドイツ、スイスでは既設原発も廃止すると言っている。

まさに、高速増殖炉開発に固執している国は日本だけである。国民合意もされていない中でももんじゅの再開はすべきではない。さらに住民の安全と暮らしを守るのが地方自治体の役目であり、もんじゅは永久に停止すべきである。

No . 3 4

住所：敦賀市

(内容)

もんじゅのナトリウム漏れ事故の際も、事故がおきてから県庁に届け出たのに 12 時間もかかっている。なぜ遅らせているのか。大きな事故の場合はどうなるのか。世界的にも経済的にもふまえて、高速増殖炉の運転再開を進める理由はない。外国では経済的な面も含めて建設をとり止めている。日本だけが、なぜ急いで進めるのか疑問である。いま、高速増殖炉を運転しても原型炉であり、次の実証炉 営業炉という段階が続いている。まだ、国民はこの延長を認めていない。政府の金が湯水のようにになっているから、使いぶり、使い捨てなど、まさにおやかた日の丸です。まったくもったいないものです。もんじゅは将来の見とおしがない状況です。永久に停止すべきです。

No . 3 5

住所：大野市

(内容)

< 地震発生時におけるもんじゅ配管の安全性について不安あり >

もんじゅは耐熱上、配管が非常に薄く作られているとか、近年日本列島の各地、震帯活断層などの活動が活発化してきていると予測あり。

比較的安定地域であった関西、中国地方に大地震が続発しており、敦賀周辺には甲架城断層他いくつかの断層が存在することからも、果たして「もんじゅ」が災害時に安全が保てるのかどうか不安があります。

特に福井県に稼働期間が40年を超える老朽原発もふくめて極めて狭い地域に原発が集中していることから、もんじゅ災害が引金となって多大な被害を引き起こすことがないか心配なのですが如何でしょうか。お答え頂きたい。

No. 36

住所：敦賀市

(内容)

核燃料サイクル開発機構が住民団体に行った説明会で、「もんじゅ」の蒸気発生器の伝熱管において、ECT装置を使い幅10ミリの全周減肉した人工欠陥(けっかん)形状管を試験した結果、内面で2.5%、外面で5%で検出可能、また、同過熱器では内面で1%、外面で2%で検出可能であるとのこと。

つまり、ピンホールやひび割れは発見できないということが明らかになった。また、蒸気発生器が第3種機器で、安全審査の対象外であり問題はない、また、ピンホールやひび割れでナトリウムが冷却水に漏れても、すぐわかり原子炉を止めるので問題はないと説明されたが、水に反応し大事故につながりかねないナトリウム漏れが「おきてもみないと傷がわからない」では、本当に安全と言えないのではないか。

しかも、このECT装置を開発してきた三菱重工が、新しいECT装置の開発を断念したと内部告発があった。小さな傷でも発見できる新しいECT装置が開発されるか、それに変わるものが開発されるなど、安全が確認できなければ運転再開すべきでない。

「もんじゅは二度と動かさないでほしい」という22万の署名をしんしに受け止め、「もんじゅ」の運転再開を断念するべき。

No . 3 7

住所：福井市

(内容)

<耐震安全性について>

「もんじゅ」の耐震設計は、現行の原子力施設耐震設計基準に基づいて行なわれているが、これについては各方面から、過小な地震動想定となるとの批判がでている。兵庫県南部地震のあと、原子力安全委員会は原子力施設耐震安全検討会を立ち上げ、関係各学会がこの地震についての正式の報告をまとめないうちに、わずか半年「現行基準はこの地震に照らして妥当」との結論を出した。

しかし、この報告書自体多くの矛盾点を持っていて、到底ひとを納得させるものではない。この機会に「もんじゅ」の安全性を徹底的に洗いなおすとなれば、その耐震性についても、現行の基準やこれまでの耐震設計手法によればいいという考え方でなく、最新の科学的知見に基づいて見直しを行なうべきである。

なお、重要な建屋や機器、配管などの震動性状を示す数値が、たびたびの指摘にもかかわらず、発表文書（設計及び工事の方法認可申請書）の中で伏せられているが、これらは産業上の機密に属するものではないので公表すべきである。

No . 3 8

住所：敦賀市

(内容)

もんじゅの安全性はまだまだ確立していない 1995 年 12 月にもんじゅは、ナトリウムろうえい火災事故を起したが、その後の事故再現実験の結果は、事故時と違った結果が出て居り、同条件でも同じ結果が出せない等、もんじゅは技術的に難しいという証拠である。

軽水炉の原発で蒸気発生器に係る事故が多発している中で、軽水炉の原発よりも極めて高温、高圧の蒸気となるもんじゅで、蒸気発生器と加熱器の細管を検査する装置はもんじゅ運転時には不十分な装置であった為、平成 11 年に改良された新しい検査装置である渦電流探傷装置で現在検査されているが、20%以下のピンホール、ひび割れは発見することが出来ないことが、核燃料サイクル機構の説明で聞いて居ります。

今のもんじゅは、技術、安全性は確立していない。

（内容）

< 高速増殖炉は、技術的困難が大きく危険で、経済的には実用化できない >

ナトリウムを冷却材に使う高速増殖炉は、技術的困難が大きく、数10年にわたる研究開発努力にもかかわらず経済的に実用化のめどがたっていません。だからこそ世界各国で、研究開発から撤退したり中止しています。

「もんじゅ」は、これまでに、直接経費だけでも約6000億円以上を費やし、総額一兆円を超えと言われており、運転継続となれば、毎年100億円から200億円というばくだいな費用がかかります。世界各国が放棄した高速増殖炉にそのようなお金を新たにかけるのは浪費にしかありません。

「もんじゅ」事故で失われた国民の信頼感を、運転を再開することでとりかえせると考えているとしたら、国民世論への認識不足もはなはだしいといわざるを得ません。高速増殖炉は、プルトニウムを燃料として使いながら、原理的には使用した以上のプルトニウムをつくりだすとができる「夢の原子炉」と宣伝されてきました。政府は「技術は確立している」として、「もんじゅ」建設を推進、2030年ごろまでに実用化が可能になるとしてきました。しかし、「もんじゅ」の事故と、日本より先に高速増殖炉開発を進めていた、米、英、独、仏があいつぎ実用化を断念したことは、高速増殖炉が技術的に未確立で、経済的な見通しもないことをはっきり示しています。原子力委員会の高速増殖炉懇談会の報告書と「長計」決定のように、従来のプルトニウム利用路線にしがみついて、「もんじゅ」の運転を再開することは、新たな事故の危険と、国費のばく大な浪費をうみだすことにつながります。国民の声を聞くというのであれば、プルトニウム利用を中心とした原発推進政策の根本をこそ見直すべきです。

< 「もんじゅ安全性調査検討専門委員会」の安全性確認について >

「もんじゅ安全性調査検討専門委員会設置要綱」によれば、委員会の目的は、「『もんじゅ』の安全性について、県民の視点に立ち技術的、専門的な立場から調査検討を行う」と述べられています。具体的には、6人の大学先生が「県民の視点に立ち」もんじゅの安全確認を行うと言うのです。私の見るところ6人の「委員会」の先生は、ほとんどが「もんじゅ」推進の立場に立っておられ、その座長になられた児嶋眞平・福井大学長は、政府の長期計画（いわゆる「長計」）をつくるときの意見として「もんじゅ」は必要とのべたうえで「なぜ高速増殖炉が必要なのかを十分に説明することが必要であり、さらに、高速増殖炉「もんじゅ」の安全総点検が平成10年に終了していることに触れることが、「もんじゅ」再開の裏づけとなるであろう。

また、今後「もんじゅ」の再起動に向けて取り組むべき課題についても詳しく記述することが必要である」（00年10月7日・福井織協ビル）とまでのべて、どうしたら「もんじゅ」を動かすことができるか、まで立ち入って力説された推進論者です。

これでは結論は、はじめから出ているのではないのでしょうか。私は「委員会」には、「もんじゅ」について賛成、反対の意見を持つ多くの学者・技術者、知識人、研究者、県民の方に入っただき、徹底した論議が必要だと考えます。それに平行して県民

を対象とした討論会、シンポジウムなどを繰り返し行うことが必要です。そして、その議論を踏まえて「もんじゅ」をどうするのかの最終判断は、県民に委ねられるべきだと思います。

< 「もんじゅ」E C Tの検出精度では、蒸気発生器の安全性を保証できない >

もんじゅの蒸気発生器は、外側を4～500の高温の2次系ナトリウムが流れ、その内側を140本の伝熱管（パイプ）が通っており、熱交換により127気圧、483の水蒸気を作り出され、発電機を回します。もし、この伝熱管が破断したら、大事故が起こります。破断から蒸気発生器が破壊されれば、それは中間熱交換器（1次系のナトリウムと2次系のナトリウムとの間で熱の受け渡しを行う装置）に及び、原子炉の冷却がうまく行かなくなる、

つまり原子炉の暴走というもっとも恐ろしい事故につながる可能性をもっています。蒸気発生器の伝熱管は、微少な傷が振動などを受けているうちに大きな損傷が生ずることがあります。金属疲労による破断のきっかけはごく微細な傷などから始まり鋭いひび割れとして進行し、ついには破壊に至る。したがって、ひび割れ段階でこれをいち早く察知してこそ、事前に事故を防ぐことができます。この伝熱管を検査するE C T検査装置の精度について、今年2月9日、核燃料開発機構がに住民団体に行った説明では、「もんじゅ」の蒸気発生器の伝熱管の内面で2.5%、外面で5%（幅10ミリ以上の全周減肉した人工欠陥形状管で試験した結果）および配管の20%以上の減肉が探査可能であると言います。（減肉＝切り取られたような損傷）

しかし、幅10ミリ以上の全周現肉した傷とは相当大きな傷であり、それ以上小さい傷の場合、傷の幅と長さは小さいが亀裂が20%を越えている場合でも、傷は発見できないと言います。これでは福井県民は安心できません。

核燃は「E C T検査は法律上の義務ではないとか、蒸気発生器は一次冷却系ではない」などと言っているようですが、「委員会」がハイそうですかとうのみにすれば、県民の信頼を失います。

< 「もんじゅ」許可申請書、一部非公開では安全性は確認できない >

旧動燃は1998年6月4日、それまで全体の約三割（約3万5千ページの「もんじゅ」許可申請書のうちの1万ページ以上）が空白のまま公開されていた高速増殖炉「もんじゅ」の「設計及び工事の方法の認可申請書」の公開方法をあらため、公開しました。

しかし、まだ、「メーカーの理解が得られなかった」などを理由に、「もんじゅ」の耐震性を考えるうえで重要なデータなど約1%が空白のまま残り、現在も空白のままです。「もんじゅ」に使われている機器の固有振動周期などのデータは、「もんじゅ」の地震に対する安全性を確認するうえで、非常に重要なデータです。

特に「もんじゅ」は冷却剤にナトリウムを使う関係で、配管が複雑で管の厚さも薄く、強固な構造を確保するのが難しく、地震に弱いと指摘されており、耐震設計データの公開は安全性を保証するうえでかせませません。

また、原子力開発・利用にあたっては、「民主」、「自主」、「公開」の原則が原子力基本法で定められています。「委員会」として核燃に情報の公開を求め、データを出させて「もんじゅ」の耐震性をチェックすべきです。

(内容)

私はかねてより原子力発電は、決して安全ではないと思っています。なぜなら、原子力は全く人間勝手のために作られた不自然なエネルギーであり、歴史的には全く未熟の技術だからです。利用する事のみ進められて、後始末方策は何も考えられていません。実行されていません。

原発の設備は、関東大震災程度なら大丈夫の設計がなされていると専門の学者から聞いていますが、私は最近「三方町古文書を読む会」で寛文年間におきた若狭の大地震を知りました。若狭三方気山の川口では大地が一丈二尺(約三米60糎)ゆりより、近江国高嶋群では、一尺(約30糎)ゆり込んだ他、大津、京都、山科、伏見、竹田淀、鳥羽など被害があった。そして、最近地震学者の研究によって古文書記録の正確さが証明されています。

この様にそう遠くもない昔、この地で起きた大地震が更にはないとは言い切れません。こうした場合、原発はたえ得るかどうかも心配です。更に、さきの原発の専門家は、私に云いました。地震など天災の危険よりもなにより、原発を扱う「人」の資質、行動が最も重要だと云うのです。

学者や原発の専門家が安全委員会を作り審査をし、安全宣言をしても直接作業にたずさわる「人」に問題があっては少しも安全ではありません。現に東海村の事故、もんじゅの事故、設備不良も含んでチェルノブイリ事故などあったばかりです。

原発の設備についても、安全設計に基づいて作られているはずですが、実際は講買業者が甘い汁だけ吸い取り、子受、孫受の業者が手抜き工事をするのが常識で、人夫として働いた人々の話が伝えられて来ます。そして今、これらの施設は当初の耐用年数を越え、老朽化したものを延長使用としているのです。

一般の原発でさえこの有様であり、今回更にもんじゅの更正についての論議がされると聞いて、大変困った事だと思っています。もんじゅに使用されるナトリウムは、周囲の物質組織中の水分と反応して、莫大なエネルギーを生ずるはげしい元素ですから、この原発の危険性は幾倍にもなる事はわかっています。

原発建設作業を幾度も体験した私の知人であり、若狭の詩人である奥寺守君は、その著「若狭の海」の中でこううたっています。

原発に頼りておらば 日本は死の灰積る墓場と化さん

もんじゅの再生はもとより、現在の原発にしても、もし事故を起こしたら住民の生活や財産、生命、仕事や生涯すべてを永久にうばってしまいます。この地のみならず、近隣の広い範囲、日本全国にも、深刻な被害を興えます。政治家や行政は目先の地域振興固定資産税、電源関係補助など金の力にまよわされる事なく、もっと高度の哲学見地に立って考え直していただきたいと思います。

世界的にも、ドイツの様な先進国でさえ原発の中止方向に決断したのに、なぜ福井県ではこれを許す方向にむけようとするのか不思議でなりません。